



▲ 初等部 玄関



関西学院は、なぜ今、 新たに小学校を世に問うのか

磯貝 暁 成
(関西学院初等部 部長(予定者))

はじめに

以前、政府広報として次の文章が各新聞に掲載されました。「子どもたちへ。君たちは決して一人ではありません。一人で苦しまず、誰かに話す勇気を持ってください。悩みを受けとめてくれる人は必ずいます。どうか、たった一つしかない命を大切にしてください」

一方、教育再生会議が招集され、「ゆとり教育」の見直しが大きな動きとして具体的に問われ出しました。授業時間数の増加、また教育三法の改正が大きく動いていました。

教育の課題が、社会の課題として大きくクローズアップされていることは間違いありません。

今が、一つの時代の大きな変わり目であると同時に、社会のあり方そのものが時代に厳しく問われている時なのかもしれません。

そのような中、既存の小学校の改革にその解決を求め得ず、新しい小学校の確立をめざし、関西に同志社大学付属小学校と立命館大学付属小学校の二校が開校しました。

その二年後、関西学院は、その大きな流れを受け止め、二校を踏まえて新たな小学校「関西学院初等部」を開校させます。



▲ 初等部 中庭

『関西学院は、なぜ今、新たに小学校を世に問うのか』と題して、ここにその趣意を説明できればと願っています。

1 関西学院初等部がめざすもの

— 小学校の六年間に、見えない心は育っていた —

■ 「私」と「あなた」との直接的な出会いから始まる教育
教育に特別な方法はありません。さまざまな考え方が喧伝されていますが、教育の本質は永遠に変わらず、「私」と「あなた」との直接的な出会いから始まります。

この「私」と「あなた」との出会いをおして、学校は何をめざすのが新たに問われ出しました。

そのような中、関西に新たに設立された、立命館小学校は「寺小屋教育」すなわち「確かな学力」を標榜して、同志社小学校は「道草教育」すなわち「こころの教育」を訴えて、それぞれの大学が付属小学校を開校しました。

今、心の教育が声高く叫ばれています。人々は心に何が育まれることを期待しているのでしょうか。また、ゆとり教育のねじれから確かな学力の確立を多くの人が求めています。確かな学力は何のために身に付けるのでしょうか。

関西学院は、この「何」の中身を問題にすることが重要だと考えました。

命を与えられた「私」とは何者なのかを考え、何のために学ぶのかを知って、初めて人は自分自身を歩み出します。

関西学院が新たに小学校を世に問う理由を、この「何」に絞って説明していきたいと思います。

この「何」に属することとは、知識で分かるものではなく、「私」と「あなた」の関係の中から感得されてくるものです。

現代、子どもたちの保護者は、自分の子どもときちんと向き合い、会話や交わりにどれだけの時間を取ることができているのでしょうか。その直接的なかわりが家庭からさえも失われつつあること、地域の目、地域の声が消えて久しいことも現実です。ここに今日的な教育の課題が潜んでいるのかもしれません。

学校においても知識を教えると同時に、またそれ以上に私たち教師は、教科や学校行事をとおして、子どもたち自身どのような逆境におかれたとしても、希望を持って歩む大切さを語り続けてきたかどうか。教師は教師自身の生き方を、「私」と「あなた」の関係の中で語り続けてきたかどうかは重要です。

■ 見えない心、「たましい」

一人ひとりの生き方を考えるために、キリスト教学校では、「礼拝」の時間が毎日あります。そこで語られることとは、「あなたはそれで良いと思っているが、本当にそれで良いのでしょうか。本当の自分を生きるとはどういうことでしょうか。苦しみや悲しみは、生きるうえで決してマイナスではありませぬ。むしろ新しい世界に飛躍するきっかけとなるもの

なのです。ぬくぬくと育つ世界だけにいると、小さな自分で終わってしまいます。逆境にあるときに新しい自分を造る入口なのです。」という問いかけでした。

この自分を考える者の「たましい」に問いかけるのは、中学・高校の時代ではすでに遅すぎるのかもしれませんが、むしろ一人ひとりの「たましい」は、静かに小学校の時代にこそ育っていたのでした。

今は余りにも結論を急ぎ過ぎます。自分の「たましい」の叫びを自分自身で受けとめる時間が足りなくて、子どもたちはただ急がされる苛立ちに翻弄されている時代なのかもしれません。それならば、なおさら一人ひとりの「たましい」が静かに育ち出す小学生の時代に立ち返って、「たましい」の育つ歩みに添うことをめざして、関西学院は小学校を開校するに到ったのです。

2 夢を失った時代に、夢を育む教育を

— 子どもを取り巻く危機を乗り越えて —

■ 「私」は誰

「私は何のために生きているのか」、短いフレーズですが、この言葉を自分自身に問いかけたことがないでしょうか。この問いは性別も年齢も関係なく、小さな子どもまでも時に自分に問いかけることがあります。

関西学院が今、新たに小学校を世に問うのは、一人ひとり

に与えられている「たましい」の育つ歩みを取り戻そうと願ったからでした。

「たましい」に耳を傾けるには、一人ひとりの「たましい」の育つ、長さの違う時間、そして見えない世界に気づくことが必要です。

子どもを取り巻く危機、自分の夢を失った子どもたちが多くいます。いじめや不登校は誰にでも起こりえることです。「わたしは、ここにおいても良いの」と呟く子どもがいたとしたなら、皆さんは何と応えるでしょうか。

現実には、その者の周りには越えられない障害が横たわっていたとしても、そしてその障害が明らかに越えられないものだったとしても、目に見えることだけですべてを判断してしまうと、厳しい現実に出会った途端に自分の夢を失っていかなければならないくなります。

現実の厳しさを知ったとしても、それだけではない世界のあることを信じる、たくましい「たましい」の育ちに、次の世界を期待したいものです。現実の苦しい状況を背中に背負いつつ歩いていく勇気の育つことを願うのが教育だと考えます。

■ 自分の夢を生きる

見えないものに心を傾け、夢を育む学校、それが関西学院初等部なのです。

では、人はどうすれば自分の抱く夢を諦めずに生きられる

のでしょうか。自分の抱いた夢を諦めずに持ち続ける力はどこから得られるのでしょうか。

夢を実現するには、その夢を実現させるに足る確かな学力が必要なのは言うまでもありません。しかし、現実の困難を乗り越えていく前向きな姿勢を突き動かしている力はどこから得るのででしょうか。それでもなお自身の夢を生きていくのだという、その者を突き動かす勇気はどこから生まれてくるのでしょうか。

見えるものだけで判断せず、見えないが着実に来るであろうこれからの世界を信じる感性を大切にすることから自分を信じる力が育っていくのではないのでしょうか。

夢を抱くためには、未来に開かれた心が必要です。自分の心が遙か彼方に開かれていないと夢を持ち続けることはできません。

逆境にあればあるほど、夢を抱き続けることは難しいものです。自分すら信じられなくなるからです。見えるものだけの世界で結論をだすか、見える世界を超えたその先の世界を信じるかによって、自分の生きる世界の広がり違ってきます。

夢を育むのが学校です。夢に生きる子どもたちは、自ら動き出します。

3 ハンドメイド教育とテラーメイド教育との二方向教育が必要

—その者に合った手立てが、人の温もりを通して行われたなら—

■ハンドメイドとテラーメイド

ハンドメイドとテラーメイドという姿勢は、学校だけに限らず、家庭においても、人が人とコミュニケーションをとっていく際にとっても重要なことです。その人に合った手立てが、人の温もりをとおして行なわれるかどうかのポイントです。

皆さんは、相手のことを思って一所懸命にやっているのに、相手がそれに応えてくれないと、相手を思う気持ち揺らぎ、心の中に相手に対する不信感や苛立ちを覚えたことはありませんか。「これだけ手間暇かけてあげたのに、どうして感謝しないのか」「こんなに愛おしく思っているのに、どうして分かってくれないのか」などなどです。

確かに、ハンドメイドには、その人の温かさがあります。人の心について言えば、便利だからと、合理的な方法や効率的な機器をとおして行なうのではなく、自らが「私」と「あなた」の関係の中にかかわる、そのハンドメイドが人の心を育んでいくことは事実です。

ハンドメイドとは手作りのことですが、ただハンドメイドだけでは問題です。そこにはテラーメイドの視点が必要です。テラーメイドとは、お仕着せではなく、その人に合った寸法で一人ひとりに服を誂えることです。

手作りは必要ですが、誰のために手作りなのか、単に自分

の満足のためであってはならないと誰もが知っていますが、気づかないうちにそうしてしまっていることがあります。

誰もが良かれと思つて教育を行ないますが、その人に合った手作りでなければ、その行為自体が逆の結果を生み出すことがありました。

手作りは誰のために、何のために必要なかがきちんと押えられていなければ、互いの関係は修復できないところまで至ってしまうこともあります。

学校が最も願っていることをしようとする行為そのものが、学校の最も願っていないものを生み出しているのが現代の学校の姿かもしれません。

■その人「らしさ」

学校で何を身につけたのか、高度な知識と同時に、自分らしさを悩み確かめながら身につけていたかどうかはとても重要です。

その人「らしさ」とは、言葉では表現できませんが、そこで生活した人が自然に身につけていくものです。

では、「らしさ」とはどうやって分かるものなのでしょうか。それはその場を一步外へ出れば分かってきます。年を経たしみじみと理解されてくることもあります。あの時あの場所で過ごした時間が、今の自分を培っていることを感じる必要があるはずです。

人とは、人が人と出会い、その者とかかわりを持つ中で、

互いが育つていくものなのでしょう。

相手のことを考えることなく、自分もまた仮面をかぶって生活していると、それは自分の時間が止まっているに等しい。必要なことを教えることと同時に、そのことがその者にとってどのような意味を持つのかをも知る時間が必要です。

4 たくましい心と確かな学力を取り戻すには

― 高い知識を、深い心が活かしていく新しい学校

■ 何のための知識

心の教育と確かな学力、この二つはこれまでも学校教育に強く求められていたものです。その指摘は、特に新しいことではありません。では、なぜ今ことさら叫ばれるのでしょうか。誰もが、その二つが今疎かになっていると感じ出しているからかもしれません。

一人ひとりの「たましい」が育つためには、それぞれの子ども「たましい」の育ちに合った時間が必要でした。そしてその時間に寄り添う者がいる空間が必要なのです。その上で、確かな学力を考える時間が必要なのです。

■ 教科教育としての縦系と、それを織り成す「横系」教育

今、教育界では確かな学力をどのように定着させていくかが大きな課題となっています。ゆとり教育から起こってきた問題を授業時間数の増加で克服する動きもありますが、単純

に時間数を増やすだけで解決することでもありません。

増加した時間数をどのように使用するかは重要です。関西学院初等部では、この増加させた時間を「関学タイム 60」として設定しました。

布がどのように織り成されていくかを考えてみましょう。布は縦糸と横糸からできています。美しい図柄や絵は横糸によつて織り成されていきます。

確かな学力、深い思考力を定着させていく上で、このことは非常に示唆に富んでいます。一本一本の糸が張られていてもそれだけならば、それらは単なる糸に過ぎません。縦糸が横糸で織り成されることによつて布になります。線だけでは弱い、横糸によつて初めて線が面となるのです。

私たちがこれまで教えてきた教科・科目が縦糸だと考えてください。どの教科・科目も入門から徐々に高度なレベルに達していきます。算数では、足し算と引き算を覚えて、掛け算・割り算へと進みます。中学で方程式を学び、高校では因数分解から始まり、微分・積分へと進んでいきます。さらに高等数学へと思索の世界は広がっていきます。言うなれば一つの縦糸を下から辿って行くのです。このことは他の教科もまた同様です。どこまで辿っていけるかは一人ひとりに違いが出てきます。

この辿った知識の量だけではなく、そのことを土台として生み出されてくる推論や思索の方法を育むことが重要なことです。

■ 心の時間、理数系の時間、国語系の時間、国際系英語

活動の時間のそれぞれ毎日一五分

「たましい」に問いかける『心の時間』、心には自分の意識できる部分と意識化されない部分があります。その心の全体とでも言うべき「たましい」に一人ひとりが毎日向き合い、「生きる」とは「考える時間」です。

理数系の時間『力の時間』とは、一つの公式が使えるか否か、化学式が解けるかどうかのレベルではなく、その公式、その化学式にどんな意味が含まれているのか、どんな課題が潜んでいるのかを考えていくものです。力とは分析し推論、仮説を立てられる力のことです。

国語系の時間『風の時間』とは、文字を読むこと、漢字が書けることから始まって、文字が文章となり、論理的な文章、感受性豊かな文と、さまざまな表現に出会っても、その行間さえも読み取る思考と感性を育みたいと考えています。

国際を考える『光の時間』とは、自分を知り自分をきちんと伝えられること、同時に相手を知り相手をきちんと認められることから始まります。英語教育ではなく英語活動を通して、六年生で実施する小学校六年間の集大成としての「カナダ・コミュニケーション・ツアー」の達成をめざします。

「横系教育」の時間が、これまでの教科教育の時間に新しい展開を与えるのではと期待します。

おわりに

これらのことが、綿密なシラバス（学習の時期「いつ」、学習の内容「何を」、学習のねらい「何のために」、学習の方法「何を使ってどのように学ぶのか」を明記したもの）となり、すべての教員はむろんのこと保護者にもシラバスが提示され、理解されて初めて教育の理念が具体化されたと言えます。

最後は、やはり教員一人ひとりがどれだけ学校の教育理念を自分のものとしていくかにつきます。

学校に、「建学の精神」が生きて働いていることが大切だとすれば、新しい学校はまさにそれによって建てられたがゆえに、その力を持っています。教員もまたそのために自分の力を発揮しようと試みるのです。

私たちは、新しい時代に応えていきたいと願っています。